空間・社会・地理思想 16 号，111-127 頁，2013 年
Space, Society and Geographical Thought

「トリエステ人」とその非現前の地理

クラウディオ・ミンカ *
（山﨑孝史 **、全ウンフィ ***、キーナーヨハネス ***、黒田将広 ***、紀元太希 *** 訳）

Claudio Minca
'Trieste Nazione' and its geographies of absence.
Social & Cultural Geography 10 (3), 2009, pp. 257-277.
Copyright 2013 from 'Trieste Nazione' and its geographies of absence by Claudio Minca.
Reproduced by permission of Taylor & Francis Group, LLC. (http://www.tandfonline.com).

要旨：この導入的なエッセイはトリエステの歴史と地理を広く概観することを目的とするが、とりわけ強調されるのはトリエステの過去の解釈がどのように比喩、つまり地理的想像力の特徴的な組み合わせによって構造化されているかである。この都市がどのようにその過去―そして現在―を表象するかを理解するためには、これら繰り返し現れる比喩や地理的想像力を吟味せねばならない。この意味で、トリエステの現代的かつ歴史的な地理をさらに実証的に探求する諸論考を擁する本特集において、このエッセイはそうした探求に必要な歴史的―しかし「理想的」でもある―文脈を提供する。

キーワード：トリエステ、アイデンティティ、民族、ヨーロッパ、非現前の地理

トリエステの地平

ハプスブルク家は、近代期のトリエステを地中海における中央ヨーロッパ版サンクト・ペテルブルクとして創出したが、それは類のない都市的実験であった。2世紀半以上の間、この都市は、ヨーロッパのブルジョア的モダニティにとって重大な緊張と不安、さらには希望とあこがれの舞台であった。今日でもトリエステは、イタリアの都市の中で最も「ヨーロッパ的」として自己表現し続けている。トリエステの研究は容易ではないが、魅力的でもある。というのは、その歴史がユニークな地政的・地経的geo-economic「実験室」であるからだけではない。もろくて複雑なアイデンティティの地平にトリエステの「都市的実験」が刻み込まれており、この都市がある時点で純粋にコスモポリタン的な都市社会を作りだすこともあれば、ヨーロッパにおける最も陰鬱で血なまぐさい民族(主義)的領域化に道を開いたこともあるからである。

今日、気高い未亡人、哀愁に満ちた衰退の舞台、壮大な帝国的プロジェクトの記憶を体現したものとしてトリエステはしばしば記述され、表象されるが、こうした反響はこの都市のアイデンティティの言説を今でも特徴づけている。この創作された退廃の感覚が数えきれないやり方で都市にとりついており、訪問者は、存在しえたが、一度も存在せず、将来も存在しないであろう何ものかにしつこく付きまとわれるような感覚におそわれる（Jan Morris (2000)はそれを「トリエステ効果」と呼んでいる）。

この導入的な概説で私が主張するように、今日のトリエステの地理は複雑な*非現前absenceの地理*として見ることができる。そうした地理を形作ったのは、20世紀における最も悲劇的な個人と集団のドラマであり、民族主義の誕生からヨーロッパ人の主体の深刻な危機に至るヨーロッパのモダニティの矛盾の最も執拗な出現であった。このことを念頭に置いて、「トリエステという構想」は達成されない不完全なアイデンティティ、つまり失敗したプロジェクトとみなされるべきではなく、そうした「非現前の地理」によってヨーロッパのモダニティのしばしば忘却された側面がどのように明らかにされるかを私は強調する。

私のここでのコメントの目的は、単にトリエステの歴史のみならず、もっと重要なこととして、トリエステの過去の解釈が地理的想像力の特徴的な組み合わせによってどのように構造化されているかについて広範な紹介を行うことにもある。私が主張するのは、この都市がどのようにその過去、そして現在を表象するかを理解するためには、これら繰り返し現れる地理的想像力を吟味せねばならないというこ

＊　ロンドン大学ロイヤルハロウェイ校（現在はオランダ・ワーゲニンゲン大学）
＊＊　大阪市立大学大学院文学研究科
＊＊＊大阪市立大学大学院文学研究科院生

とである。この意味で、本特集を構成するトリエステの現代的かつ歴史的な地理をさらに実証的に探求する諸論考に対して、このエッセイは必要とされる歴史的文脈を提供する。ただし、私がここで詳述する歴史は必然的に部分的である。つまり、本エッセイによる歴史の再構築が意図するのは、トリエステの過去におけるいくつかの鍵となる時期と、特にそれらについての支配的な解釈を概観すること、そして特定のプロセス、出来事、さらに個人がトリエステの過去の特定の読解にどのように組み込まれ、そしてそれらの読解がトリエステの「アイデンティティ」に関する特定の理解をどのように具現化してきたかを考えることである。したがって、私が参照する文献も部分的であり、この都市の「公的」歴史を記してきた主流派のイタリア語文献にもっぱら限られている。にもかかわらず、ここで提供される解釈はトリエステでの私自身の特定の経験の成果である。トリエステは私が生まれ、人生の大半を過ごし、地元の政治的、学問的状況に関わり続けている場所なのである。

本エッセイにおいて、私がトリエステの「非現前の地理」と称する議論が三つの比喩のまわりに構築される。三つの比喩とはトリエステの歴史の大部分を特徴づけ、この都市の不安定で達成されないアイデンティティを今日も定義する三つの地理的想像力であり、トリエステの歴史と近代ブルジョア的主体の歴史とを結びつける三つのルートである。第一は、「トリエステ人」という概念、つまり帝国の「交易中心」という基礎とともに生まれたコスモポリタン都市の理想であり、そして今日でもトリエステ人の（自己）表象と実践に残り続ける概念である。第二は、トリエステの「領域的な」地理を定義する際に果たす「民族問題」の固有の役割である。そして第三は、トリエステの理想化された「非現前の地理」である。この地理によって、はるかかなたの参照点、未来の達成しえない歴史的、地理的な地平、絶え間なく延期されて決して達成されることのない運命という点から、トリエステは想像されてきたのである。つまり「非現前の地理」とは、Ara and Magris（1982: 4）を引用すれば、「［ヨーロッパの］モダニティの異種混淆性と矛盾、そして［ヨーロッパにおける］中心的な基盤や価値の統一の欠落を映し出すものとしての」トリエステという構想なのである。

「トリエステ人」

1719年、カール6世はトリエステを自由港として宣言した。瞬く間に、この都市は一地方漁村から隆盛するハブ港に変貌した。そこはアドリア海に拡張しようとする壮大なハプスブルク帝国のプロジェクトとアジアへの新しい交易ルートの開設において鍵となる場所となった（Finzi, Panariti and Panjek 2003）。実際、18世紀を通して、トリエステの命運はオーストリア国家の変容と密接に結びついていた。1841年［訳注: 1741年の誤植］からのマリア・テレジアの即位と一連の根本的な制度改革の開始は、トリエステに深い刻印を残した。つまりテレジア時代における新たな政治的想像のなかで、トリエステは帝国の商業中心地かつ地中海への出口として鍵となる役割を与えられたのである（Dubin 1999; 本特集のPurvis 2009; Rumpler 2003）。

トリエステに無数の「異民族」と帝国官僚を引きこんだ一連の新しい帝国的特権によって、伝統的な自治体の構造はひっくり返された。自分たちの目前に起こっている変容を導く資本や必要な技量をもたないが故に、伝統的な都市貴族階級はたちまちその政治・経済的権力をはぎ取られた（Negrelli 1978）。しかし、貴族たちの影響は全く消えてしまったわけではなかった。実際には、まさしくこの「古いトリエステ」と成長し国際化する都市との遭遇から、近代的トリエステの複雑なアイデンティティ、つまり商業・貿易活動にひたすら専念する新都市がもつ特徴的な「都市精神」が生まれた（Finzi and Panjek 2001; Gatti 2001）。

既に18世紀末には、トリエステはブルジョア的近代都市であり、君主国家を「近代」国家へと複雑かつ政治・社会的に変容させるための特権化された実験室となっていた（Rumpler 2003）。伝統的にイタリア人が集住する都市中心（および伝統的にスロベニア人が多数を占める都市周辺、Kacin-Wohinz and Pirjevec 1998; Merku 2001; Verginella 2001参照）のそばに、一連の新しい近隣地区が出現し、ユダヤ人、ギリシャ人、レバント［訳注: 地中海東岸の地方］人、イリュリア［訳注: アドリア海東岸の古代国家］人、オーストリア人、ゲルマン人、イタリア人が住み着いた（Catalan 2001参照）。「コスモポリタン都市」としてのトリエステという神話、そして現実、が生まれたのはここである（Cervani 2006参照）。トリエステの「交易中心」は投機家や資産家だけではなく、ここに稀有な宗教的表現と信仰の自由を見出したフリーメーソンやその他無数の人々を

も引きつけた。この自由はテレジア期の改革によって認められたものである（Negrelli 1978）。トリエステは宗教的寛容のオアシスとなり、そこでは多様な「民族」が共存した。「民族」は、その言葉の前近代的な意味において、民族自身を経済的かつエスニックな原理のもとに組織し、移民流入を調整する上で中心的役割をはたした。この移民流入はトリエステの人口を（後に19世紀全体を通して）膨張させ続け、トリエステを帝国第3位の都市に成長させた（Faber 2003）。ここで現れたのは紛れもない企業的構造であり、その中で様々な「民族」は、さらなる協働に向けて進んでいくことが相互利益になると考えた（Andreozzi 2003; Ferrari 2001）。1809年から1813年のフランスによる占領もこの都市とその自治的野心に重要な政治的刻印を残した。オーストリアが都市の支配権を握るにつれ、ヨーゼフ2世が帝国全体に実施した一連の中央集権化と「ゲルマン化」の改革にトリエステは従属する。オーストリアによって課せられた「ゲルマン化」は大部分官僚的で非民族的であったが、帝国の中央集権化の圧力はトリエステにおいて逆説的な反応を呼び起こした。すなわち、新しい商業中心の多民族的ダイナミズムのなかで急速に消えつつあった古い地方自治的伝統そのものの復活であった。古いトリエステの都市貴族階級の「精神的遺産」は、この旧エリート層の後を継いだ世代によって復活した。そしてこのあいまいな（そして意識的に再構築された）「遺産」こそが、トリエステの近代的アイデンティティの一つの重要な柱を構成するようになる（Gatti 2001; Millo 1989）。

19世紀前半において、「トリエステ人」という構想とそれにまつわる神話の全てが登場し、統合されたのは、遺産が理想化され再構築されてからである（Negrelli 1978）。この時期はトリエステの発展において鍵となる時期であった。つまり、トリエステは様々な新しい芸術的、建築的プロジェクトによって美化され、成長するブルジョア層に利益となるような都市の文化的生活への本格的投資を始めたのである[1]。都市商業層の利害は、自由港化以後の最初の数十年間とは異なって、もはやウィーンの利害と直接には一致しなかったが、この階層は文化的、政治的な領域においてもそのニーズと野心を一層明確にし始めた。しかしながら、フランツ1世とメッテルニヒ体制下のオーストリアの絶対主義的な政治風土のなかで、このような野心が受容される余地はほとんどなく、トリエステ市民はウィーンの中央集権化政策にますます不満を持つようになった（Rumpler 2003）。この不満は、都市のリベラルな金融・商業エリート層に見られたばかりではなく、ブルジョア層全体、その最も保守的な部分の中にさえも広がった。トリエステの複合的なアイデンティティのはかない本質を何とかとらえようとする試みの中で、「過去のない」新しい商業都市は潜在的なルーツを探し始めた。そして、郷土史家のドメニコ・ロセッティDomenico Rossettiの研究に依拠する形で、トリエステの「特別な」歴史的使命という考え方が現れ、自己肯定し始める。それゆえトリエステのブルジョア層の自治主義的主張はRossetti(1815)が提唱した特徴的な「自治体主義的」（かつイタリア化する）神話の中に包み隠された。トリエステの多民族的金融・商業エリート層は、ロセッティのいう「都市パトリオティズム」をトリエステの住民の全てを統合しうる理想としてもろ手を挙げて採用した。とはいえ住民のほとんどはロセッティ的な神話の歴史的、政治的ルーツを何も共有していなかったのである（Negrelli 1978）。

この「実験」は急変するヨーロッパの政治的文脈にも強く条件づけられており、トリエステのエリート層もその変化を鋭敏に感じていた。そのエリートたちの政治的立場とアイデンティティの選択が密接に結び付けられ、影響されていたのは、「文化的」民族と「政治的」民族との関係に関わる広範な省察であり、これが当時ヨーロッパ（そして、特に、ゲルマン人）の知的論争を支配していた[2]。それゆえ、トリエステの都市エリート層の懸念はアドリア海都市とそのドナウ川流域／中央ヨーロッパの後背地との間の関係についての考察に変わっていく。そしてこの省察こそが後にトリエステの将来を決定的に特徴づけ、続く世紀に都市を引き裂く民族紛争に結果していく（Agnelli 2005; Apih 1988; Rumpler 2003参考）。

自治体神話の（再）創造はこれら懸念への一つの反応でもあった。トリエステの成長するブルジョア層が必要としたのは、都市の多様性の全てを一つのイデオロギーの傘下にとらえうる単一の統合的モデルであった。それは全トリエステ市民にとって魅力的で、新しいアイデンティティの神話と新しい政治的、地理的心象を活性化できる「文明的モデル」であった。ロセッティとその追随者たちの研究において、トリエステは特別な「郷土」（*パトリア patria*）、つまりイタリアとゲルマンという2つの偉大なヨーロッパ文明が出会う独特の都市として表象された。この心象の中で、トリエステは、民族、宗教、来歴を問わず全ての異民族を吸収しうる例外的なヨーロッパの実験室として自己表象した（Rossetti 1815; Negrelli 1978参照）。つまり「差異のるつぼ」とし

て、そしてヨーロッパ全域を席巻しつつあるように思われた民族(主義)的熱狂の解毒剤として、トリエステは自己表現したのである（Agnelli 2005; Finzi 2001a, 2003; Finzi, Panariti and Panjek 2003)。

この異種混淆的な移民のコミュニティは、それゆえに、トリエステのリベラルなブルジョア的伝統、ないしはその理想的な表象の中に共通する目的の感覚を見出したのである。しかし、統合のもう一つの重要な要素があった。それはイタリア語と特に東地中海一帯で話されていたヴェネツィア植民地の方言の一変種である。この方言が新しい移民にコミュニケーションと同化の鍵となるツールを提供した(Finzi 2001b, Pellegrini 2001)。したがって、この新しい移民の到来が過去との極端な断絶をもたらすようには見えなかった。どちらかといえば、それは古いイタリア自治体の言語との持続性を確保するかに見えながら、この古い言語を新しい表現や影響でもって豊富にするものであった。この方言がトリエステを特徴づける印として残り、その住民のすべてが共有する唯一の歴史的遺産となった[3]。Schiffrer (1946) がよく主張したように、トリエステは「イタリア、スラブ、そしてゲルマン的な言語や文化の領域の間の境界にまたがるコスモポリタンなイタリア都市であった」。

広大なハプスブルク帝国の縁辺部に位置する都市として、多民族的商業中心そして海運港としての使命によって「コスモポリタン」であり、言語によって「イタリア的」都市として、トリエステの独自性という考えは徐々に確立されていった（Ara and Magris 1982)。この時期、トリエステは経済的な成長中心としての役割も確たるものとした。都市の商業・交易エリート層の多くは投資家となり、短期間のうちに帝国の新興保険業の中で紛れもない独占を確立するようになった。ゼネラリ保険会社Assicurazioni Generaliや Riunione Adriatica di Sicurtà (RAS) 社は現在もヨーロッパの大手保険会社のうちの二社であるが、その誕生はこの新しく確立された独占を特徴づけている。オーストリア・ロイドLloyd Austriaco社の設立は、フォンブルック男爵Baron von Bruckの政治的支援のもとで、トリエステの新しい役割を一層確たるものにした。保険・海運会社のロイド社はトリエステの経済的利害の総体を象徴するようになり、会社の命運は多くの点でトリエステの命運と結びつくようになった（Finzi, Panariti and Panjek 2003; Negrelli 1978)。それに続いて、トリエステが具現化するようになったのは、群を抜いたブルジョア資本主義が隆盛し、国家の制約から比較的自由な都市であった。それは自らを領土的な観点からではなく、海洋都市として、つまりアドリア海と地中海の「コスモポリタンな中心都市」として考える都市である[4]。

フォンブルック男爵[5]はGiornale del Lloyd紙を創刊し、この新聞は直ちにトリエステの金融・商工業エリート層の声を伝える媒体となり、東洋に対する帝国の政治経済的野心を積極的に宣伝した。同紙の大中央ヨーロッパに向けての哲学的、地政的プロジェクトのなかで、トリエステは新しい「中央ヨーロッパ人」を「生産」し、旧大陸の命運を変えるべく運命づけられた理想的場所としてのみならず、中央ヨーロッパとアジアとの間をつなぐ新しい軸を構築する恰好の起点として、つまり西ヨーロッパの「大西洋への偏向」を釣り合わせるのに必要なおもりとしても想像された[6]。それゆえに、19 世紀半ばに、トリエステは鍵となる地中海への「架け橋」かつ東洋への欠くことのできない「門」として再創造されるようになった。つまり帝国はアジアとの商業的関係を求め、トリエステは、そのコスモポリタン的伝統と関係によって、新しい帝国の冒険を開始する理想的な場所に見えたのである(Agnelli 2005)。

ヨーロッパで起こったさらに広い地経的、地政的変容のなかで、トリエステの役割はますます重要になるが、その結果、都市のアイデンティティという難問はそれ以上に切迫していった。この時期にこそ、「トリエステ人」という概念が急速に都市エリート層の想像力をとらえ、トリエステ社会全体にとって著しく重要な参照点となったのである（Negrelli 1978)。ハプスブルク家によって強化される中央集権化政策に抵抗して、中央ヨーロッパ全体での新しい政治的民族主義の高揚への反応として、トリエステの多民族的エリート層が都市の統合性を見出したのは、「トリエステの民族性」という理想、つまり当時の都市の特徴であると想定された「コスモポリタン的」側面を独自に捉えうる理想においてであった(Rumpler 2003)。

にもかかわらず、「トリエステ人」という構想は、都市の特定の「文化的民族性」と同一化することを基礎にしていた。つまり、都市全体とともにエリート層内における支配的要素が（少なくとも言語の点では）イタリア的なものであったから、トリエステが必然的に依拠するのはイタリア文化であった（Finzi 2001b)。トリエステ方言は都市のリンガ・フランカとしてさらに統一され、都市の特殊性の肯定と帝国の中央集権化の諸力への対抗として作用した。トリエステのイタリア的な文化アイデンティティの肯

定は、その都市の「自治体」としての特殊性を(再)主張することと並行し、内なる経済的、政治的統合を確保していった。「トリエステ人」という構想(理想)はまさしくこの目的に貢献した。この構想は、特徴的な「生活様式」と社会的相互作用を表現した。つまり、自らをトリエステ的想像の中で単一の都市的「民族」として認識する多様な民族コミュニティが理想的な(理想化された)平和共存を実現するという状況である(Andreozzi 2003)[7]。

都市のエリート層はオーストリア国家の「プラグマティックな」概念にも強く影響されていた(Magris 1996参照)。そしてこの概念こそが、実際に中央ヨーロッパという(地)政治的構想の中心に据えられており、この構想が19世紀半ばにおけるトリエステの自治体政治に再び重要な影響を及ぼすことになる(Agnelli 2005参照)。1848年以降に君主国内に流布し始めた連邦主義的解決への提案はトリエステ人という構想にも共鳴する部分を見出した。これが「利益の有機的な連合体」を具現化するプラグマティクな「経済的」選択と見なされたからである。実際、「トリエステ人」という構想(理想)は、以下の二種類の考え方*双方*に代わる理論的対案として示された。一つは国民国家の原理であり、もう一つは皇帝という人物を中心に統合され、帝国官僚制という結合組織によって政治的に構成された(今や)二重君主国の新しい想像力である(Agnelli 2005)。

トリエステにおいて、独自の都市の「民族的存在」を(再)発見し、肯定することは必ずしも独立への要望を意味せず、新しい国民国家の創設を目的とはしていない。つまり、この心象のなかで、国家と民族との結合は解かれ、全ての民族の権利を保障する「自治体連邦主義」を支持するものとなる(Negrelli 1978)。1848年の直前、トリエステのエリート層は、都市にさらに広範な自治を与えるであろう地位を通して、その固有の「民族性」を認識することを要求した。トリエステの要求は、当時は多様な特権と自治を帝国の様々な「人民」に与えることによって暴力の形をとる民族主義がもつ危険性に対処する試みであり、帝国の根本的な再編成のプロセスのごく一面に過ぎなかった(Cattaruzza 1998; Kann 1977)。近隣での新しいスラブ民族の出現やゲルマン人とロシア人の影響の増大によって、ますますトリエステはヨーロッパの政治地図を再画定するプロセスの中心に置かれるようになった(Ara and Magris 1982)。トリエステは、イタリア、ゲルマン、スラブという3つの異なる「文明」が交差する重要な場所を占めた。また、この位置のゆえに、トリエステの「実験室」が要求したのは、自らその一部を構成する帝国への忠誠をいかなる方法でも覆すことなく、その「民族的」地位が特別に承認されることであった。トリエステはオーストリア的であり、イタリア的であったが、とりわけコスモポリタンな*海洋都市*であり、そうあり続けたいと願ったのである。

領土化の圧力と民族主義の勝利

ヨーロッパにおける1848年は、トリエステとそのコスモポリタン的想像力の転換点として特徴づけられる。その後の変化について詳細な歴史的説明を提供することは本エッセイの目的ではない、それは多くの他の研究者が既に行なってきた[8]。むしろ、私が特定したいのは、「トリエステ人」というコスモポリタン的プロジェクトが漸進的に崩壊し、領域的な民族主義が勝利した背後にある重要な理由のいくつかである。

1848年に続く数十年間はハプスブルク君主国内で大きな変容が起きた時期である。つまり、帝国が新しい憲法を制定し、「イタリアの」領土のいくつかの部分を喪失した(トリエステにおいても深刻な喪失として受け止められた)。とりわけ更なるゲルマン化と属州化を主張する者と「中央ヨーロッパ」連邦の理想を支持する者の間で緊張が高まり、それによって帝国は分裂した[9]。同時に、帝国内の多くの人民がこの新しい革命的な理想の中に見たのは、自らの独自の政治的、文化的なアイデンティティの肯定と最終的な民族自決に至る道筋であった。メッテルニヒの保守的で中央集権を指向する政策は、そうした期待を和らげるには驚くほど無力であった。それため、1848年の余波の中で、オーストリアが格闘せねばならなかったのは、急速に拡大し、ますます急進化する労働者階級の要求と新しい非ゲルマン系知識人エリートの民族主義的要請の双方であった(Rumpler 2003; Kann 1977も参照)。

トリエステはこの社会的、政治的動揺を免れたわけではなく、1848年以降の数十年間は、トリエステのアイデンティティの地平をコスモポリタン的で地中海的な展望から民族領土的な理解へと変化させる上で決定的な時期であった。「トリエステ人」という構想(理想)はトリエステのエリート層の中でイデオロギー的魅力を失いはじめ、構想が立脚した自治体自治の伝統とイタリア文化のヘゲモニーという2本の柱はまもなく非常に異なった意味を持つようになった(Millo 2003参照)。トリエステの都市的独自

性の基礎となっていた「文化的民族」という構想（理想）は「政治的民族」の構想（理想）に変容した。そして、19世紀の後半にこのアドリア海都市が自ら突き進んでいった政治的環境の中で「イタリア性」は防衛的な戦略および新しい統合の中心になった（Sestan 1998）。国民国家の地図化の圧力が「イタリアのトリエステ」という公式のレトリックを支配したのはこの時期であった。これは台頭してきた、そして敵対的な、スロベニア人が持つトリエステの心象においても同様であった（Schiffrer 1946参照）。そうした地図学的、領土的な理解は以前のコスモポリタン的伝統と対照的な形で自己肯定した。この伝統は完全に消滅したのではなく、多くのトリエステ市民の日常的な実践と交流を構造化し続けていたが、公式の政治的レトリックの中ではますます周辺化されていった（Foschiatti 2006）。

アラ（Ara）とマグリス（Magris）が描写するように、19世紀半ばまでに既にトリエステは

> イタリアとオーストリアの間で分裂し、精神的な切望と自己利害の間で分断され、永続的な緊張状態に置かれていた。この緊張は都市の最も熱心な観察者たちによって解決できないものとして知覚された。というのはトリエステのアイデンティティそのもの、つまりその歴史的役割と物質的な富が、一方ではイタリアへの文化的、精神的帰属と他方では経済的な「オーストリア主義」という二重のリアリティにまさしく結び付けられていたからである。この二つの間の対照性がトリエステの劇的な出来事と活力、つまり存在条件そのものを構成したのである（1982: 49）。

引き続くウィーンとの緊張をさらに悪化させたのは自由港としての特権の喪失であった。この措置をトリエステの経済的エリート層は裏切り同然のものとみなした（Rumpler 2003参照）。この変化はさらに重大なものになったが、それはまさにこの時期にトリエステが地中海の商業中心から近代的な工業港に漸進的に変容したからである。その変化は経済的、社会的変容のみならず、トリエステの*海洋都市*としての（自己）表象にも深い影響をもたらした変化でもあった（Cattaruzza 1995）。トリエステの経済と（自己）表象に影響を与えたのは1860年から61年にかけてイタリア王国が誕生したことと、1866年以降に、ヴェネト州が切り離され、新しいイタリア国家の一部を形成するようになったことである。ヴェネト州の「喪失」は、一方でトリエステと（イタリアの）「母国」との統一を要求する多様な失地回復運動への支持を高め、他方でトリエステの帝国内での孤立感を強めた（Ara and Magris 1982）。それにもかかわらず、注目すべきは、ウィーンとの紛争が一触即発状態にあるというのは、色々な意味で、都市の政治的エリート層側の修辞戦略でもあり、さらなる譲歩を引き出すことが巧みに企図されていたことである。というのは、君主国とのつながりは都市の残存にとって解消できず、不可欠のものと考えられていたからである。実際のところ、ウィーンはトリエステから自由港の特権を剥奪したが、帝国の新しい「東方」戦略の一部として多額の投資をしており、特にスエズ運河の開削に伴い、トリエステを理想的な「東洋への架け橋」とみなしていたのである。そして、帝国の支援があったからこそ、トリエステの海運、保険会社が国際的に拡大することができ、トリエステは君主国の経済成長の中心の一つになったのである（Finzi, Panariti and Panjek 2003も参照）。

しかし、別の一連の要因によって、トリエステのエリート層が理想とした地平は根本的に変化した。この都市と君主国による中央集権化の圧力との間にある積年の確執は、イタリア人多数派と一層可視化され、政治的に組織化されたスロベニア人少数派との間の緊張の高まりによって覆い隠された（Schiffrer 1946参照）。スロベニア人のブルジョア層と一群の文化教育機関の出現は、イタリア人エリート層の重要な関心事になった。なぜならこの階層は都市の民族的バランスのみならず都市の既存の社会経済的構造の維持にも腐心していたからである（Negrelli 1978; Verginella 2001参照）。そうした知覚された脅威への反応として、新しい形態の（政治化された）民族意識が生まれたのである。

実際のところ、1848年が大きく変化させたのは、トリエステならびにアドリア海東岸全域における「イタリア人」と「スラブ人」との関係である（Cattaruzza 2007; Schiffrer 1946）。都市のブルジョア層は、自らが民族的存続の戦いの前線に立っていると見なし、新しい「スラブ人」の領土的、文化的野望とみなされるもの、つまり既存の社会秩序のみならず、アドリア海都市の存続そのものに対しても脅威とみなされるものに脅かされていた。トリエステのスロベニア人コミュニティは都市とその直近の後背地で数と影響力を増し、多様な「民族」をイタリア化したコスモポリタン都市に同化させるという歴史的プロセスを疑問視し始め、スロベニア人固有の民族的アイデンティティを保護する必要性を主張した（Ara and Magris 1982）。何世紀もの間、スロベニア人

はトリエステの郊外に住んでいた（Merku 2001）。スロベニア人の都市生活の中での役割はごくわずかで、主に教会の分野とスロベニア人地区に土地と資産を所有する小貴族の分野に限られていた。しかしながら、19世紀をとおして、トリエステの増大する富によって、ますます多くのスロベニア人が引きつけられ、都市とその近郊に集住した（Verginella 2001参照）。当時、多民族的な貿易・商業層がコスモポリタンでブルジョアのトリエステを構成するようになっていたが、それと並んで、都市近郊出身の労働者から主に構成される新しい移住者が現れた。

この移住者の歴史と階級構成はイタリア人とスラブ人との将来的関係を強く特徴づけていくが、それはトリエステにおいてのみならず、都市世界と農村世界の間における機能的、イデオロギー的の分裂という点においてもであった。多くの他の帝国都市はその周辺地域の「民族的」特性を受け入れたが、そこで起こったことと対照的に、トリエステではスロベニア住民が少なくとも初めのうちは都市の坩堝に融合した。スロベニア的要素がコスモポリタン的トリエステの中に「消失」していく状況は、スロベニア人の意識が漸進的に「民族化」される1848年以降に大きく変化する[10]。しかしながら、そうした変化はこのアドリア海都市内に住んでいたスロベニア人にのみ当てはまるのではない。つまり、19世紀末において、

> 全てのスロベニア民族が［トリエステを］民族独立の闘争の中で鍵となる参照点とみなしたのは、トリエステが裕福で近代的な都市として名を馳せたからのみならず、当時主要な「スロベニア的」都市であったからでもある。つまり、都市とその近郊を考慮すれば、1910年のトリエステのスロベニア住民人口はリュブリャナよりはるかに多かったのである（Ara and Magris 1982: 51）。

スロベニア人によるトリエステの表象に、新しい地理的心象、つまりトリエステの民族領土的読解が現れる。

> 当時の政治的レトリックにおいて、後にスロベニア人の歴史記述にもあるように、都市というものは後背地に「帰属」し、それを表現するものと考えられた。つまり農村にこそ一つの領域の始原的、真正的、汚れなき本質は存在するのである。トリエステはスロベニア人が卓越する地域の中心に位置し、スロベニア人領域内に孤立したイタリア人都市であり、それを取り巻く土地からは分離できない（Ara and Magris 1982: 51）。

それゆえに、このアドリア海都市が担った役割は、生まれつつあるスロベニア民族の「生来の」精神的首都であり、その「攻略」は民族自決の中心的目標となった。都市化したスロベニア人エリート層はこの目標を達成するために、多くの重要な文化的、経済的機関を創出し、支配的なイタリア的（イタリア化する）言説と並行するオルタナティヴな一組の政治的言説を作り出した（Verginella 2001）。19世紀の半ばから終わりにかけて、トリエステの起業家はその成長する産業のためにスロベニア人労働者を求め続けており、ゆえに都市内の人口学的バランスは変化していった。その一方で都市エリート層はスロベニア人の存在を一層不安視し、スロベニア人コミュニティを「民族的」敵と位置づけ始め、想定されるスロベニア人の「脅威」を都市のイタリア人多数派を動員する要素として用いた（Valdevit 2004）。

トリエステのエリート層の少数派だけがイタリアの領土回復運動そのものに傾倒したが、支配層は「民族防衛」の政治へと徐々に進み始め、それは反中央集権主義的ながらも、とりわけ反スラブ的な調子で表現された。「民族問題」は若いイタリア人の知識層の間に合意を広げる手段ともなり、この階層は帝国境界の向こう側にある新しいイタリア国家という心象にますます引き付けられた（Vivante 1912参照）。たちまち、「民族問題」はイタリア系トリエステ市民の多数派に共有される日常的関心事になり、都市の政治生活すべてがイタリア対スロベニアという「民族」分断によって分極化された（Schiffrer 1946; Valdevit 2004; Valussi 1972）。かつて社会経済的分断であったものが「民族」問題となり、二つの新しい政治的主体が現れ、避けがたく調停不可能な形で対立し、それぞれがこのアドリア海都市の将来に関する独自のビジョンを描いた。「トリエステ人」の諸理想は完全に後景に退き、都市内に深刻な社会的・政治的な分裂を生み出す緊張がそれに取って代わった。この分裂は20世紀の最後の10年間になって漸く収まり始める（Sluga 2001参照）。

民族対立の漸進的過激化に伴って、都市エリート層の旧「コスモポリタン的」分子すら自由国民党と同盟するようになった。この政党はイタリア「民族問題」の傑出した擁護者としてトリエステの政治論争を独占していた（Negrelli 1978）。同様の展開はスロベニア人側にも見ることができる。ほどなく二つの「民族」政党が、ともに自らの民族コミュニティ全体を代表していると主張し、トリエステのあらゆる政治を「民族的」利害の対立劇に従属させることに成功した（Sapelli 1990; Schiffrer 1946）。こうした二

元論的弁証法の中で、急速に成長する社会主義政党のような他の立場の声はかき消された。労働者階級も「民族的」線引きに沿って分極化され、社会主義政党の綱領は相対的に限られた魅力しか持たなかった(Apih 1991; Cattaruzza 1998)。

第一次世界大戦の直前になると、両陣営間の対立はますます激しくなった。つまり、トリエステのイタリア人の多くにとっては、今や、アドリア海岸地域のイタリア性を防衛することは、都市にとっていかなる経済的代償がかかろうとも、イタリア国家との政治的、領土的統合を通してしか成し得ないように思われた。一方、成長するスロベニア人の民族主義は、ウィーンの側に立つ反イタリア的政治という装いによって勢いづけられ、トリエステの排他的なイタリア性の否定にますます立脚するようになった(Schiffrer 1946)。民族主義的紛争のすべての矛盾はこの大戦とともに爆発する。つまり、1918年が示すのは、トリエステが何世紀にもわたって帰属してきた世界からの決裂である。この世界がトリエステに見出していたのは、ドナウ川流域を経済的に統合する象徴であり、この流域がトリエステに繁栄をもたらし、真に「ヨーロッパ的」な都市にしていたのである。しかし、1918年が特徴づけるのは、もっと広い意味で、国民国家の論理がコスモポリタン的理想に決定的に勝利したということでもある。

「イタリアのトリエステ」

トリエステの想定される「母国」への「復帰」は複雑で困難な過程であった。最初の熱狂的時期が過ぎると、すぐにイタリアは官僚的で中央集権的体制とみなされ、イタリア人、オーストリアの支持者、そしてスロベニア人の間にある都市内の緊張をさらに悪化させた(Visintin 2000参照)。トリエステは長きに渡って培われた民族的存在の神話から「イタリア人であること」の厳しい現実へと移行する準備が少しもできていないように思われた(Schiffrer1992)。都市のエリート層が栄光ある過去の記憶に固執したまま、再び逃げ込んだのは、想定される「スラブ人の脅威」に対する「民族防衛」という挑発的で攻撃的な政治の中であった(Valdevit2004)。新たな民族的(民族化された)文脈において、突然、トリエステはその扱いを知らない国の二流の周辺都市へと格下げされた。つまり、その国はトリエステをもっぱら「修復される」べき、「イタリア化される」べき問題とみなした。トリエステは、深いアイデンティティの危機のみならず、経済的衰退にも陥り、「あのイタリア」に関して一連の誤解を引き起こした。これら誤解は、多くのトリエステ人の集合的心象の中に長く、今日までも留まり続けていく。都市の主要産業は国有化され、ドイツ語を話す住民の大部分は去り、名声のあるドイツ系学校は閉鎖された。中央ヨーロッパ的でコスモポリタン的なトリエステの相貌が崩壊するにつれて、都市のエリート層のもっぱらの関心は「民族問題」に留まり、「イタリア人」と「スラブ人」の間の分断はさらに先鋭化した(Fogar 2005)。領土化の圧力が勝利したことは、実際にその後の数十年間都市を圧倒し、Ara and Magris(1982)が称する「トリエステの最も暗い時代」につながっていった。それは、第二次世界大戦、ナチスに続くユーゴスラビアと英米人の占領、そしてトリエステへの戦後の屈辱と周辺化の時期である。戦後、トリエステは単に「トリエステ問題」に還元され、戦後のパワーポリティクスの中で地政的な抵当になり、その運命はもはや市民の手中にはなかったのである(De Castro 1981)。

しかし、簡単に戦間期を振り返り、どのように民族問題が防衛的な政治から攻撃的で拡張主義的なプロジェクトへと変容したのか理解してみよう。重要なことは、ファシズムが当初は「輸入された」現象であったが、トリエステに発展する土壌を見つけ、自由国民党の論理的な継承者として立ち現われ、その結果都市における民族(主義)的政治を独占したことである[11]。イタリア国家はこの時点で民族意識を独占し、トリエステのスロベニア人コミュニティをますます暴力的なやり方で迫害し、領土化の圧力を強化し始めた。スロベニア人の政治的、文化的組織は地下組織化を余儀なくされ、第二次世界大戦の終わりに都市を分裂させる紛争の素地を用意した(Pahor 2008; Valdevit 2004)。

非常に逆説的だが、トリエステのイタリア化とアドリア海西岸に関するファシストの政策によって、トリエステ市民は自らの運命がスラブ系隣人たちと結びつく状況の重大性に気づくようになった。同時に、ファシスト体制による「イタリア性」の暴力的肯定によって両陣営の対立が激化し、スロベニア人の民族的独自性の感覚が補強、統合され、結局アドリア海地域におけるイタリア人の存在を取り返しがつかないまでに弱めてしまったのである(Pupo 2005参照)。領土化の圧力は極端な結果へと導かれ、それゆえに都市を襲う緊張に対する一種の最終的な解決策に向かう舞台を整え、「トリエステ問題」を「民族」問題へと還元した。したがって、ほどなく両陣営にとって他者の政治的存在そのものが耐え難いも

のとなった。民族紛争の激化と並行して、イタリア政府がユダヤ人を排除するために制定した1938年の人種法は、トリエステとその支配エリート層の構造そのものに更なる打撃を与えた[12]。トリエステ人のブルジョワ層は、自らが実現しようと懸命に努力しているまさに同じ「民族的な」歴史的運命の犠牲者であると気づくようになった。つまり、トリエステはその存在そのものにおいて引き裂かれたが、その経済的、政治的、文化的エリートの最も重要な部分を排斥したのは、それほど遠くない過去にエリートたちが歓迎し、支持していた民族化する国家だったのである(Ara and Magris 1982)。

スロベニア人にとって、トリエステからほんの数キロしか離れていない場所に、新たなユーゴスラビア国家が形成され、「故郷」のファシスト体制によってますます迫害されるのを目の当たりにして、トリエステの攻略は自らの民族の解放と自決にとって一層不可欠な条件となった。第二次世界大戦期と特に終戦直後の時期において、トリエステのスロベニア人コミュニティは民族的、社会的解放という希望を強化し、共産党の綱領へと緊密に結びついた。共産党にとって、トリエステの「特殊性」が保たれうるのは、ユーゴスラビア国家が与える民族自治の保証によってのみであった(Kardelj 1946, 1953)。実際、チトーのユーゴスラビアは、アドリア海におけるイタリア人の存在は人工的で植民地的現象であり、存在理由はないという強力な領土的主張を展開した。つまり、(トリエステを含む) その地域の主要な沿岸都市は周辺の(スラブ人)地方に「生来的に」帰属していると主張したのである。トリエステの言語的、文化的「イタリア性」を認識しつつも、ユーゴスラビアの地理的心象は、トリエステをスラブ・アドリア海世界の中に強固に位置づけていた[13]。それゆえに、イタリア対スラブの紛争はその最終段階に入った。第三帝国の崩壊に伴い、トリエステとヴェネツィア・ジュリア地域の「民族的な」将来に関する戦略的決定が下されねばならなかった(Sestan 1998)。この地域の命運は

> 国際的かつ国内的、政治的にして軍事戦略的な命運の複雑な組み合わせによって深く条件づけられていた。そうした命運とは、ファシスト時代の道徳的な歴史的負荷、戦争におけるイタリアの敗北と西側の列強、とりわけイギリス、がユーゴスラビアと交わした約束…、ソ連のみならずイタリアの共産党も与えたチトーへの完全な支援、終戦直前までにヴェネツィア・ジュリア領の大部分を支配し1945年5から6月にかけての悲劇的な40日間はトリエステ自身を支配したユーゴスラビアのパルチザンの侵攻である(Ara and Magris 1982: 149)。

「トリエステ人」という構想(理想)は、その都市のブルジョア的でコスモポリタンな切望同様に、すっかり消し去られたように見えた。多くの点で、トリエステの喪失は類例のないヨーロッパの実験室、そして全く異質な、非排他的で非領土的な、民族の構想の喪失でもあった。最初はナチスそして後にユーゴスラビアの占領という暴力に続き、終戦時には、何千人ものイタリア人難民がユーゴスラビアによって占領されたイストリアから出国し、トリエステに流入する(Pupo 2005)。ほとんどの難民はトリエステに定着するが、そこはアドリア海のイタリア人が長い間その生来の「地域的」中心都市として見なしていた場所である。難民の到来によってトリエステの人口はほぼ2倍になったが、民族問題も再燃した。この民族問題は難民にとっての家と財産の喪失そして出生地からの強制排除という事態に影響されていた[14]。英米による占領は1945年から1954年まで続き、西側の勢力圏内にトリエステを維持しつつも(そして、結果的に、トリエステをイタリアの支配下に復帰させるが)、長期にわたる不確かな政治的、文化的中間地帯を作り出した。トリエステは二つの世界の間で宙づりされ、どの国家にも属さず、それ自身の運命を支配できずに、国際的な地政治geopoliticsの気まぐれに翻弄されたのである(De Castro 1981参照)。

戦後における政治的、文化的論争は冷戦の秩序によって必然的に制約され、その秩序の中でトリエステはまさしく「境界地域」、つまり鉄のカーテンの前にある西洋最後の前哨地となった。民族問題が再燃するが、今度は共産主義の東側ブロックの境界にあるトリエステの「イタリア性」を、その都市を資源よりも問題とみなすイタリア人国家とともに、反動的に防衛せんとする議論であった(Valdevit 2004)。事実、この民族問題こそが、1954年のトリエステのイタリア復帰に続いて行なわれた最初の民主的選挙を支配した。そして、トリエステの政治的言説の主流は、よく知られた一組の二分法、つまりイタリア人/スラブ人、民主主義/共産主義という図式をめぐって表現された。もっとも、これら言説は「外国」で遠いところにあるとみなされたイタリア国家へも逆説的に対抗していた(Cecovini 1968参照)。再び、トリエステの生命は領土化の圧力の中で麻痺したように見えたが、今度は冷戦の地理によって要請された圧力であった(Ballinger 1999)。この時現れた政

治的な諸力は、二分された世界というこの新しい地理的想像力にまさしく依拠していた。この想像力は、もしトリエステがトラウマ的な過去や「西洋最後の境界」としての現在の条件によって定義されないのであれば、それに代わりうる都市の政治的未来すら排除していた。トリエステが確信したのは、他者(ファシズム、イタリア国家、連合軍の決定)の過ちの代償を払うことを強いられたということであった。そして包囲されたような心情が広まり、それは苦悩に対する補償の欠如と不正義という深い感覚によって特徴づけられた（De Castro 1981)。トリエステのスロベニア人コミュニティもこの方程式の中で敗北した。つまり、スロベニア人は外国の「マイノリティ」住民に格下げされ、そういうものとして、「内なる敵」とみなされたのである (Sluga 2001参照)。

それゆえに領土化の圧力は両陣営に敗者を作り出し、すべてのオルタナティヴな声を本質的に沈黙させた（Karlsen and Spadaro 2006)。のちに冷戦が終結し、ヨーロッパ連合が東方に拡大するようになって初めて、トリエステはその複雑で重層的な経済的、文化的伝統をとらえ、その過去の対立を調停しうる新しい政治的プロジェクトを想像し始めるに必要な条件を見いだす(Valdevit 2004)。

現前しないものを空間化する

今日、トリエステの都市的表象の多くが依拠するのは多文化的な中央ヨーロッパ都市そしてコスモポリタンなアドリア海中心都市として理想的（理想化された）イメージである。しかし、トリエステのこの地理的想像力がどれだけ正確に新世紀の始まりにおけるトリエステ住民の日常生活をとらえることができるだろうか。私がこれまで強調してきたように、近代のトリエステは一連の理想的（理想化された）地理と自治体のアイデンティティの上に築かれ(繁栄し)、トリエステ「人」という概念の中に最も明確に表現された。これらの理想化された地理は、トリエステのプロジェクトへの帰属を特徴づける基本的な指標となった。すなわち、互いにはトリエステ方言を話しながら、都市の多様なコミュニティは、その出自となる民族によって文化的には独自性を留め、(コミュニティの純然たるトリエステ性によって確立された)「ここにあるという性質hereness」と (その遠く離れた、その意味で「現前しない」民族によって具現化される)「どこか他所にあるという性質elsewhereness」の間で果てしなく変化する相互作用の中にある。実際、この都市の支配的想像力はそうした「非現前の地理」をめぐってこれまで常に構造化されており、今もされ続けている。つまり、「非現前の地理」とは、理想的な意味 (それ自身価値あるものとしての非現前)において、ならびに「本質の地理」に明確に対抗するものとして構造化されている。そしてこの「本質の地理」が領域的国民国家というヨーロッパ・ブルジョアのモダニティというもう一方のグランド・プロジェクトを支えてきたのである。ハプスブルク家の夢によって可能となった近代のトリエステは、中央ヨーロッパにとっての海洋的、アドリア海的地平の政治経済的射影projectionとして、つまり東洋へのオーストリアの入口として誕生した。その位置、そしてその存在そのものは、中央ヨーロッパとの交通経路的かつ戦略的な関係なしに、あるいはアドリア海の回廊とその広大な海洋的地平なしに意味をなさなかった。トリエステの地理は、確かに人々、モノ、そして交換といった明確に物質的な地理であったが、ヨーロッパの地平たろうとする明確に観念的な地理でもあった (Agnelli 2005; Rumpler 2003参照)。

この都市によって具現化される理想的な都市のビジョンがその門戸を開いたのは、多様な世界からやってきた個人と文化、つまりトリエステにおいて自らを単一の(そして単数の)都市的心象と独自の「都市的精神」の一部として自らを再構築する個人、文化、および世界の全てであった。これら「諸民族」が一つの共通したプロジェクトのもとに融合することから、「トリエステ人」の構想 (理想) が生まれた。この理想が形成されたのは、それ以外に複合的な民族がいないという魅力的な「非現前の地理」の中であったが、それはトリエステの「奇跡」を唱える様々な論者の心象の中でしばしば神話化された。この理想的な地理は共有された都市の言語、つまりトリエステ方言によって現実化された。しかしながら、この方言も現前しない場所の言語であり、終わりなき再構成、付加と削除、つまりヴェネツィア地方語をスラブ語、ドイツ語、ギリシャ語など数えきれないその他の影響と融合した結果生まれたのである(Minca 2009参照)。この理想的な言語の容器の中においてこそ、トリエステ住民を「特別な」人々とする神話が花開いたのである。つまり、固有の「都市民族」が特定の領域と結びつかず、むしろもっと広い、海洋的な地平によって触発されているという神話である。トリエステが理想として想像される際に、

この都市は自らをほぼ完全に海を通して定義し、その後背地が提供する結節性（それは翻ってトリエステが自己をアドリア海及びさらにその先へと投射することを可能にする）までではないにしても、本質的に後背地を無視した。

1848年は、トリエステの「非現前の地理」が領域的形態を持ち始める重要な通過点であり、コスモポリタン都市の理想の終りを示す。実際のところ、コスモポリタン的、地中海的用語よりも「民族的」、領域的用語でトリエステが理想とする「非現前の地理」を再解釈する試みこそがまさしく、トリエステの「差異の競演」を競合する民族主義間の死闘へと置き換えたのである。トリエステの「イタリア性」は、かつてはこの「都市民族」の固有性を示す単なる文化的表徴であったが、排他的な民族的帰属と領域の表徴へと漸進的に変容した。イタリア系トリエステ人は、自らを失われた母国の孤児として、*(その民族が)「現前しない地理」*の一部として、実現されるのを待つイタリアの民族的な夢の射影としてますます考え始めた。1860年代から第一次世界大戦の勃発にかけて都市を特徴づける第二の非現前は、逆説的ではあるが、ウィーンの不在である。多くのトリエステ人の認識において、ウィーンはトリエステを裏切り、その特権を損ねるように思え、反イタリア的そして反自治体的態度においてスラブ人の民族的野心を支えるものであった。しかし特にウィーンがトリエステから自由港の地位、つまりこの都市がその自己イメージ全体とヨーロッパおよび地中海での中心性を構築していた地位を剥奪することを決定したことがそうした認識の理由であった。最後に、第三の非現前はトリエステのスロベニア人少数派が知覚したスラブ民族の不在という感覚である。つまり、自らの首都と国家を欠いたちょうどその時期におけるスラブ民族の不在である。にもかかわらず、スロベニア人たちはトリエステを民族生来の首都として、民族の歴史的、地理的運命を実現するものとして想像し始めた（Ballinger 2003; Kardelj 1946）。

要するに、これがトリエステの理想的な（理想化された）非現前の地理を枠づける歴史的文脈であり、二つのものの間の緊張によって特徴づけられる。一つは、急速に成長し進化する都市の様々なエスニック、政治経済的コミュニティ間にみられる一連の流動的なアイデンティティの実践と複雑な関係網であり、もう一つは、別の理想的な（理想化された）地平にある「なにものかが無い」状態において都市の精神をとらえようとする「固く」、ますます領域的になる地理的想像力である。しかし、この時に理想化されたのは土地に結び付けられた、本質的で、絶対的で、民族的な地平である。この変化にこそ、その時代のトリエステの悲劇的な運命の起源がある。この悲劇は色々な意味でヨーロッパ全体の悲劇を反映していた（Kent 2007）。

理論上は、1918年のイタリア国家の到来はトリエステの（民族的な）「歴史的運命」の達成として特徴づけられるべきであった。しかし、現実には、すぐにファシスト国家になる「母国」がトリエステを併合することによって、トリエステの「非現前の地理」が一層顕著になっただけであり、トリエステは永遠に達成されないプロジェクトになった（Schiffrer 1992）。イタリアへの併合にともない、トリエステは最終的にウィーン、つまりトリエステを近代都市にした帝国によって孤児にされた。そしてその帝国は第一次世界大戦と共にヨーロッパの地図から永遠に消し去られた。しかし、トリエステはイタリア国家に対しても孤児にされたと感じていた。イタリア国家自身がトリエステの実験室の複雑な性質を全く理解できないことがはっきりしたからである。イタリア人「同胞」の到来は、イタリア系トリエステ市民によってさえ、民族再統合の夢から全く異なったものとして経験された。この夢が長年にわたりトリエステの自由国民党のエリートを突き動かしてきたのである。しかし、それ以外の結果がはたして可能であっただろうか。トリエステの場合のように、*現前しないものの理想的想像力*に基づいたいかなる地理も、本質的には、現前しないものを再統合することによって解決することはできなかった。また、単純な*「現前」*によっても解決することはできなかったのである。トリエステが存続し繁栄することが可能であったのは、更新され続ける地平によって促進される絶えざる変異、創造的均衡という条件下においてのみであった。そして、地平は「固く」、限定された領域によって与えられることはできなかった。つまり、地平とは、定義上は、射影とプロジェクトであり、未来へのまなざしである。それゆえに、非現前の地理を物質化することは、それ自身が幻想、もっと悪ければ、（領域の）わなであることを露呈するだけであった。

実際のところ、ファシスト国家がヴェネツィア・ジュリア地域に押し付けた領土民族化の政治は当初からトリエステ市民の最大の関心事になった。ファシスト体制がトリエステを単に植民地化され、「イタリア化される」べき周辺地域としてしか見ていないことを市民がほどなく気づいたからである（Apollonio 2004; Matiussi 2002）。さらに、トリエステ

市民は常に自らの想像力を導いてきた地平を唐突に奪われたと感じた。また、トリエステの場合ように、*それ自身からも亡命しているような*コミュニティには、あらゆる非現前の地理を通して無限に期待を膨らますことができるという特権的条件が与えられるが、それも奪われてしまった（Schiffrer 1996）。同時に、トリエステのスラブ人コミュニティは、その眼前に新しいユーゴスラビア国家が現れるのを興味深く注目していた。この国家は自ら全ての南スラブ人の聖域であると宣言し、トリエステがいつの日か南スラブ人の中心都市にもなる具体的可能性を想像し始めた（Kardelj 1946）。しかし、ファシストのトリエステという現実はその反対の方向を示し、スロベニア人の諸機関をますます暴力的に抑圧し、強制的同化によってスロベニア人の政治的な存在を消去しようとした。トリエステのスロベニア民族は沈黙させられ、その（再び、現前しない）母国によって「解放される」ことを待ちわびた（Ballinger 2003; Sluga 1994b, 2001参照）。

ナチの占領期と戦争直後の(最初は40日間のユーゴスラビアによる占領、続いて10年間の英米による統治、そしてイストリア地方からのイタリア人の大量流出で特徴づけられる)期間は、トリエステの将来を全く不確かなものとした[15]。この条件はトリエステの自己表象を大きく特徴づけ、もう一度この都市は現前しないものを演出する舞台となった。もっとも、この時に現前しなかったものとは、かつてのように一時的な条件ではもはやなく、むしろ一種の逃れることのできない運命、つまり夢の終わりのように思えた。戦争が終わって、事実上トリエステに残された地平は「閉ざされた」ように見えた。なぜなら、トリエステが野心的な地理的想像力を失ったからである。トリエステはこの地理的想像力のために、そしてその中で生まれたが、ナショナリズムと20世紀の悲劇はそれを暴力的に消し去ってしまったのである（Kent 2007）。

戦後にトリエステの自己表象を特徴づけた「非現前の地理」は、その前の数十年のものよりも一層複雑であった。戦後のトリエステで現前しなかったものはとりわけイタリアである。つまり多くのトリエステ市民はそう考えたのである。多くの市民が、イタリア国家はトリエステを周辺的存在に置いたと意識していた。つまり、その国家は他のプロジェクト、言語、思考を持ち、トリエステをどう扱うべきか分からなかった。トリエステは、とりわけ問題として、忘却されるべき歴史的、政治的期間を想起させるとみなされたのである（Cecovini 1968を参照）。推定するに、イタリアがトリエステを「放棄した」というこの認識が均衡化されたのは、イタリアによるあいまいな補償の政治によってであった（Valdevit 2004）。これは一組の財政移転と補助金であり、都市の商業的、コスモポリタン的「精神」をさらに弱める方向にしか作用しなかった。戦後期のトリエステを強力に特徴づける第二の非現前は、新しい共産主義国ユーゴスラビアに割譲されたイストリア半島のそれである。この喪失は、決して戻りはしないヴェネツィア・ジュリア時代への哀悼とノスタルジアを刺激し、戦後期のトリエステ社会に深刻な影響をもたらす結果を招いた（Ballinger 2004; Pupo2005）。トリエステの政党政治は、悔恨や自責の念といった心情を無節操に利用し、戦争のトラウマと国外脱出の悲劇を政治的資本へと変容させ、「あるがままに」可能な限り長くこの非現前の地理の中に凍結し、あらゆるオルタナティヴな政治的心象を排除した（Ballinger 2003; またSluga 2001; Valdevit 2004参照）。最後に、第三の非現前は、トリエステのスロベニア人によって知覚された非現前である。トリエステのスロベニア人は、ユーゴスラビアによる短いトリエステ占領期の後、再び国家なき民族、非スラブ都市における少数民族となり、共産主義とユーゴスラビアの主張に同一化したがために、多くの市民からトリエステおよびそのイタリア的伝統への敵とみなされるようになった[16]。

この間、戦後数十年の中で、もっとも明らかに現前しなかったものは、トリエステにとっての新しい文化的、政治的地平である。そうした地平によって、トリエステは自らを未来に投射し、アドリア海の中心都市として想像され、失われた役割を回復させる都市的ビジョンにその力を結集することができたであろう。実際のところ、この知覚された「グランド・プロジェクトの不在」によって、1975年の選挙民の反乱を説明できる。そこでは新しい地方政党「トリエステのリスト Lista per Trieste」[17]が勝利したが、トリエステの有権者を成功裏に動員した方向は、伝統的（そして全国的）政党への全般的な不信感、ゾナ・フランカ（自由貿易地域）をトリエステに構築しようという呼びかけ、そして最終的に1975年のオージモ条約の拒絶であった[18]。事実、オージモ条約後にユーゴスラビアとイタリアは2つの比喩的そして政治／領域的「主体」になり、それに対抗して、トリエステは都市としてのその運命を定義している。ただし、今やトリエステは（現実のあるいは推定された）栄華の記憶を単に振り返るだけの都市に落ちぶれている（Cattaruzza 2007参照）。

新しいヨーロッパのアイデンティティを実験する

今日のトリエステは、その栄光ある過去の遺産よりもむしろ、想像された衰退と悔恨の地理を通してのみ自己定義できるのだろうか。理想化されたコスモポリタン的なプロジェクトと、トリエステを地中海のモダニティの並はずれた実験とした海洋的な地平の中で、何が残ったのだろうか。今日のヴェネツィア・ジュリア地方の中心都市を記述する際、以下のいずれかの事態を避けうることがいかに可能だろうか。一つは民族(主義)的地図学のわなに落ち込むことであり、もう一つはトリエステの遠い過去の甘美な祝福に屈服してしまうことである。後者はトリエステを安っぽい気高さという色で彩っており、とりわけ現在の課題とジレンマを無視している。

ある意味で、「トリエステ人」という理想化された想像力がここ20年程の間に再び登場し始めている。とはいえ、都市の政治を見るにつけ際立って客観的でほとんど皮肉に満ちたやり方（存在様式としての一種のポストモダン的な倫理で、トリエステの小説家マウロ・コバシッチMauro Covacichが巧みにとらえたもの）であれ、（特に）境界に対する都市住民の徹底的にプラグマティックな態度であれ、それはまだ控え目なやり方で登場している。ポスト冷戦期の新しいトリエステの表象が焦点を据えてきたのは、差異の調停という日常的な実践に対してである。つまり、トリエステの表象は、この都市が民族主義の強固な領域化という暴力によって傷つけられたと想像しながらも、その「特別な」地位、個性的な方言、そして地図学的に記述しうるよりもはるかに複雑なその性質を誇ってもいる。差異についてのそうした皮肉に満ちつつ全く平凡な理解―Covacich(2006)を引用するならば、全てのトリエステ市民がどこか別のところからやってきた、「トリエステ性」とは固定されたアイデンティティではなく「世界の中の存在様式」の一つであるという気づき―こそが、都市的アクターたちがトリエステの理想的（理想化された）「コスモポリタン的伝統」を再要求する試みの中で最も明らかな表現を構成している。このアクターたちはトリエステを「ヨーロッパ地中海の」中心都市として再想像する出発点としてこの伝統を活用しようとしている(Illy 2005参照)。

トリエステの命運と都市的アイデンティティをかくも長きにわたって定義していた境界の消失[19]はもっぱらそうした想像力を強固なものにした。それはあたかもこの境界の非物質化が民族主義的心象と戦後期全体の悔恨の文化をはぐくんできた領域的理解の刹那的性格を単に明らかにしただけのようであった[20]。この境界は1991年のはるか前にほとんどのトリエステ市民にとって全く異なった意味を既に持っていた。なぜなら、イストリアやダルマチア地方の海岸での週末の周遊、日曜の昼食、そして夏の休暇で習慣的に横断されていたからである。実際のところ、驚くべき数のモノやヒトの交流（境界を越えたトリエステ市民への肉、果物、野菜、および廉価なガソリン、ユーゴスラビア市民へのトリエステの工場での仕事や住宅）によって、この境界は1960年代以降既にヨーロッパで最も開かれたものの一つになっていた[21]。そこでトリエステ方言はトリエステ人の帰属意識を（再）構築する鍵となってきた(Minca 2009参照)。しかしながら、今日この方言は都市の様々な移民コミュニティで、つまり最近移入したセルビア人とボスニア人から、マグレブ地方や中国からやってきた移民の子どもたちに至るまで話されている。19世紀にそうであったように、このリンガ・フランカは「トリエステ性」への帰属の証拠としての役割を持つ。しかし、それは民族的でも領域的でもなく、単に都市的であり、トリエステ的でないものからの違いを示す共通の印となっている。

冷戦の境界の消失に伴い、過去20年程のトリエステの未来についての想像力がその潜在的な役割として焦点を据えてきたのは、国際的な研究の中心（Picchieri and Pugliese 2004）、拡大されたヨーロッパの重要港と交通上のハブ（Caroli 2004）、そして中央ヨーロッパの文化的極と多文化実験室（Apuzzo 2001）であった。にもかかわらず、近年における、トリエステについての(のための)最も野心的な地理的想像力は、この都市をオーストリア、スロベニア、そしてクロアチアそれぞれの一部を組み込む新しいユーロリージョンの仮想的首都とするプロジェクトである。このプロジェクトはこれらの領域の間に結び付きと共有される空間を最大限活用するようデザインされ、そのなかで「民族的、文化的差異は、辺境としてよりも、価値のある資源としておそらく最終的にはみなされるであろう」[22]。

これら地理的想像力の明確な目的は、これを最後に、「民族問題」を超越し、トリエステの（しばしば対立的な）差異の調停の経験を、今日の「境界なきヨーロッパ」における新しい「可能性の条件」へと変容させることである（Illy 2005）。実際のところ、トリエステの都市的リーダーたちのそれほど隠されていない希望は、そうした新しい「ヨーロッパ・プロジェクト」の中で[23]、トリエステが非領域的なシ

チズンシップの実験室に再びなることができ、その失われた中央ヨーロッパと地中海の地平を再び要求することができるということである[24)]。

注

1) Cattaruzza(1995)、Panjek(2003)およびVisintini(2001)参照。
2) 当時の帝国における民族政策の変化やその文化的論争の考察については、Robert Kann(1977)の独創性に富む研究を参照。Hobsbawm(1990)も参照。
3) トリエステ方言についてはAra and Magris(1982)やMinca(2009)参照。
4) Waley(2009)の本号における論考は「コスモポリタン」都市としてのトリエステの概念についてより深く考察している。「地中海的コスモポリタニズム」の特徴についてのもっと幅広い考察には、Chambers(2008)参照。
5) 後の帝国経済相。
6) 大中央ヨーロッパの地政的心象に関する議論は、Agnelli(2005)参照。
7) トリエステ「民族」の構想は、ロセッティのような都市知識人によって擁護されたが、都市のエリート層が推進した政治経済的プロジェクトの重要な支柱としての役割を果たした。「自治体民族主義」というレトリックは多様な政治的構想への指示を喚起すること、とりわけ統合の感覚と（終始「文化的」民族主義と並存していた）独特の「都市的プロジェクト」に帰属しているという感覚を作り出すことに貢献した。
8) とりわけ、Apih (1988)、Finzi, Panariti and Panjek (2003)、Tamaro (1974)参照。
9) 議論のためにAgnelli(2005)、Magris(1996)参照。
10) Hösler(2008)、さらにKacin-Wohinz and Pirjevic(1998)。
11) Apih (1966), Apollonio (2004) そしてMatiussi (2002)参照。
12) 人種諸法がトリエステで公布されたことは重要である。
13) Ballinger (2003)参照、Melik (1946)、Novak (1970)、Sedmak and Mejak (1953)も参照。
14) Ballinger (2003, 2004)、Pupo (2005)、Sluga (1994b) そしてVolk (2004)参照。
15) 終戦直後の「トリエステ問題」の関連性について、あるいはほどなく冷戦秩序の二元論的地理の中で「文明的」境界となるトリエステの境界係争に関する議論について、ここで長々と詳述することはできない（Ballinger 1999; De Castro 1981; Sluga 1994a, 1994b, 2001参照。以下も参照 Bogdan 1970; Campbell 1976; Cappellini 2004; Collotti 1974; Dinardo 1997; Duroselle 1966; Geoffrey 1977; Kaplan 2001; Kent 2007; Lane 1996; Lees 1997; Novak 1970; Pupo 1999; Rabel 1988; Schiffrer 1992; Smith 2003; Thomassen 2001; Valdevit 1997; Vinci 1992）。
16) Valdevit (2004)参照。De Castro (1981)および、異なる見解として、Kardelj (1953)も参照。
17) http://www.listapertrieste.it参照。
18) この条約はイタリアとユーゴスラビアとの間の最後の辺境地の境界を定め、それゆえに終戦以来留保されていた「境界問題」に形式的に幕を下ろした。Valdevit (2004)参照。
19) 1991年のユーゴスラビアの崩壊、そして2007年のスロベニアのシェンゲン条約空間への参入に伴う。
20) Magris (2007)、Minca (2007a, 2007b)そしてRumiz (2007)参照。
21) Battisti (1979)、Bufon (1993, 1996)、Cattaruzza (2007)、Kaplan (2000)、Rossi (2005) そして Valussi (1972)参照。
22) 当時地方知事であったリカルド・イリィRiccardo Illy (2005)によって示唆されているように。Bufon (1996, 2003)とMinghi and Bufon (2000)も参照。
23) Bufon (1996, 2006)、Favretto (2004) そしてHonsel, Malinconico and Maresca (2006)参照。
24) 非領域的なシチズンシップについてのもっと広範な議論については、Amin (2002) そしてIsin and Wood (1999)参照。どのようにトリエステが新しい「ヨーロッパ人の」帰属意識を具現化しうるかについては、本特集号のBialasiewicz (2009)参照。

参考文献

Agnelli, A. (2005) *La genesi dell'idea di Mitteleuropa*. Trieste: MGS.

Amin, A. (2002) Ethnicity and the multicultural city: living with diversity, *Environment and Planning A* 34: 959-980.

Andreozzi, D. (2003) L'organizzazione degli interessi a Trieste (1719-1914), in Finzi, R., Panariti, L. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. II: La città dei traffici 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 541-639.

Apih, E. (1966) *Italia, fascismo e antifascismo nella Venezia Giulia.* Bari: Laterza.

Apih, E. (1988) *Trieste*. Bari: Laterza.

Apih, E. (1991) *Il socialismo italiano in Austria*. Udine: Del Bianco.

Apollonio, A. (2004) *Venezia Giulia e Fascismo*. Gorizia: LEG.

Apuzzo, G.M. (2001) Civis: progettare insieme lo spazio sociale. Trieste: Asterios.

Ara, A. and Magris, C. (1982) Trieste: un'identita` di frontiera. Turin: Einaudi.

Ballinger, P. (1999) The politics of the past. Redefining insecurity along the 'world's most open border', in Weldes, J., Laffey, M., Gusterson, H. and Duvall, R. (eds) *Cultures of Insecurity*. Minneapolis: University of Minnesota.

Ballinger, P. (2003) *History in Exile*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Ballinger, P. (2004) Exhumed histories: Trieste and the

politics of (exclusive) victimhood, *Journal of Southern Europe and the Balkans* 6(2): 145-159.

Battisti, G. (1979) *Una regione per Trieste*. Udine: Del Bianco.

Bialasiewicz, L. (2009) Europe as/at the border: Trieste and the meaning of Europe, *Social & Cultural Geography* 10(3): 319-336.

Bogdan, N. (1970) *Trieste, 1941-54. The ethnic, political and ideological struggle*. Chicago: Chicago University Press.

Bufon, M. (1993) Cultural and social dimensions of borderlands. The case of the Italo-Slovene Trans-Border area, *GeoJournal* 30: 235-240.

Bufon, M. (1996) Social integration in the Italo-Slovene Gorizia Transborder Region, *Tijdschrift voor economische en sociale geografie* 27: 247-258.

Bufon, M. and Minghi, J. (2000) The Upper Adriatic Borderland from Conflict to Harmony, *GeoJournal* 52: 119-127.

Campbell, J. (1976) *Successful Negotiation: Trieste 1954*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Cappellini, A. (2004) *Trieste 1945-54, gli anni piu lunghi*. Trieste: MGS.

Caroli, A. (2004) *Il porto di Trieste tra riqualificazione dell' area storica e logistica intermodale*. Trieste: Italo Svevo.

Catalan, T. (2001) Presenza economica e sociale degli ebrei nella Trieste asburgica tra Settecento e primo Novecento, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 483-517.

Cattaruzza, M. (1995) *Trieste nell'Ottocento*. Udine: Del Bianco.

Cattaruzza, M. (1998) *Socialismo adriatico*. Rome: Lacaita.

Cattaruzza, M. (2007) *L'Italia e il confine orientale*. Bologna: il Mulino.

Cecovini, M. (1968) *Del patriottismo di Trieste.* Milan: All' insegna del pesce d'oro.

Cervani, G. (2006) Intorno al cosmopolitismo triestino, in Karlsen, P. and Spadaro, S. (eds) *L'altra questione di Trieste*. Gorizia: LEG, pp. 125-144.

Chambers, I. (2008) *Mediterranean Crossings*. Durham, NC: DUK.

Collotti, E. (1974) *Il litorale adriatico nel nuovo ordine europeo 1943-45*. Milan: Vangelista.

Covacich, M. (2006) *Trieste sottosopra*. Rome: Laterza.

De Castro, D. (1981) *La Questione di Trieste*. Trieste: Lint.

Dinardo, R. (1997) Glimpse of an old world order? Reconsidering the Trieste crisis of 1945, *Diplomatic History* 21: 365-382.

Dubin, L. (1999) *The Port Jews of Habsburg Trieste*. Stanford, CA: Stanford University Press.

Duroselle, J.B. (1966) *Le conflit de Trieste, 1943-1954*. Brussels: Universite´ Libre de Bruxelles.

Faber, E. (2003) Territorio e amministrazione, in Finzi, R., Panariti, L. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. II: La città dei traffici 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 21-53.

Favretto, I. (2004) Italy, EU enlargement and the 'reinvention' of Europe between historical memories and present representations, *Journal of Southern Europe and the Balkans* 6(2): 161-181.

Ferrari, L. (2001) La presenza economica degli ordini religiosi a Trieste, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 335-357.

Finzi, R. (2001a) Trieste perche`, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 13-66.

Finzi, R. (2001b) La base materiale dell'italofonia a Trieste, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 317-331.

Finzi, R. (2003) Introduzione, in Finzi, R., Panariti, L. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. II: La città dei traffici 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. ix-xiii.

Finzi, R. and Panjek, G. (eds) (2001) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint.

Finzi, R., Panariti, L. and Panjek, G. (eds) (2003) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. II: La città dei traffici 1719-1918*. Trieste: Lint.

Fogar, G. (2005) Il laboratorio della catastrofe: 1919-1940, in Rossi, M. (ed.) *Istria riscoperta*. Rome: Ediesse, pp. 37-44.

Foschiatti, M. (2006) Il problema nazionale della Venezia Giulia, in Karlsen, P. and Spadaro, S. (eds) *L'altra questione di Trieste*. Gorizia: LEG, pp. 23-28.

Gatti, C. (2001) Uomini e politiche nella Trieste del settecento, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 359-379.

Geoffrey, C. (1977) *The Race for Trieste*. London: William Kimber.

Hobsbawm, E. (1990) *Nations and Nationalism Since 1780*. Cambridge: Cambridge University Press. (エリック・J・ホブズボーム、浜林正夫ほか訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店、2001)

Honsel, F., Malinconico, C. and Maresca, M. (2006) *Oltre Trieste*. Udine: Universitaria Udinese.

Hösler, J. (2008) *Slovenia. Storia di una giovane identità europea*. Trieste: Beit.

Illy, R. (2005) Euroregione: il futuro a portata di mano, in Rossi, M. (ed.) *Istria riscoperta*. Rome: Ediesse, pp. 181-

188.

Isin, E. and Wood, P. (1999) *Citizenship and Identity.* London: Sage.

Kacin-Wohinz, M. and Pirjevec, J. (1998) *Storia degli sloveni in Italia*. Venice: Marsilio.

Kann, R. (1977) *The Multinational Empire*. New York: Octagon.

Kaplan, D. (2001) Political accommodation and functional integration along the northern Italian borderlands, *Geografiska Annaler B* 83(3): 131-139.

Kaplan, R. (2000) Conflict and compromise among borderlines identities in northern Italy, *Tijdschrift voor economische en sociale geografie* 91: 44-60.

Kardelj, E. (1946) *Yugoslavia's Claim to Trieste*. New York: United Committee of South Slavic Americans.

Kardelj, E. (1953) *Trieste and Yugoslav-Italian relations*. New York: Yugoslav Information Centre.

Karlsen, P. and Spadaro, S. (eds) (2006) *L'altra questione di Trieste*. Gorizia: LEG.

Kent, N. (2007) *Trieste: A Twentieth Century Tragedy*. London: Hurst.

Lane, A. (1996) *Britain, the Cold War and Yugoslav Unity, 1941-1991*. Brighton: Sussex Academic Press.

Lees, L. (1997) *Keeping Tito Afloat*. University Park: Pennsylvania State University Press.

Magris, C. (1996) *Il mito asburgico*. Turin: Einaudi.

Magris, C. (2007) Noi e il mondo nuovo, *Il Piccolo*, 27 Dec.

Matiussi, D. (2002) *Il partito nazionale fascista a Trieste*. Trieste: IRSML.

Melik, A. (1946) *Trieste and the littoral*. Ljubljana: Research Institute.

Merku, P. (2001) La presenza slovena nella città preemporiale, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 273-291.

Millo, A. (1989) *L'elite del potere a Trieste*. Milan: Angeli.

Millo, A. (2001) La formazione delle elite dirigenti, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 381-410.

Millo, A. (2003) Il capitalismo triestino e l'impero, in Finzi, R., Panariti, L. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. II: La città dei traffici 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 125-142.

Minca, C. (2007a) Trieste e il mondo nuovo, *Il Piccolo*, 5 Dec.

Minca, C. (2007b) Trieste e il peso del confine, *Il Piccolo*, 18 Dec.

Minca, C. (2009) Speaking Triestino: social capital, language and practice, in Hakli, J. and Minca, C. (eds) *Social Capital and Urban Networks of Trust*. London: Ashgate (forthcoming).

Morris, J. (2001) *Trieste and the Meaning of Nowhere*. London: Faber and Faber.

Negrelli, G. (1978) *Al di qua del mito*. Udine: Del Bianco.

Novak, B. (1970) *Trieste, 1941-1954: The Ethnic, Political and Ideological Struggle*. Chicago: University of Chicago Press.

Pahor, B. (2008) *Necropolis*. Rome: Fazi.

Panjek, A. (2003) Chi costruì a Trieste, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 643-758.

Pellegrini, R. (2001) Per un profilo linguistico, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 293-315.

Picchierri, P. and Pugliese, A. (2004) *L'Expo di Trieste*. Trieste: Luglio.

Pupo, R. (1999) *Guerra e dopoguerra al confine orientale d'Italia*. Udine: Del Bianco.

Pupo, R. (2005) *Il Lungo Esodo*. Milan: Rizzoli.

Purvis, M. (2009) Between late-lasting empire and late-developing nation-state: a Triestine perspective on city-state relations, *Social & Cultural Geography* 10(3): 299-317.

Rabel, R. (1988) *Between East and West: Trieste, the United States and the Cold War*. Durham, NC: Duke University Press.

Rossetti, D. (1815) *Meditazione storico analitica sulle franchigie della città e Porto Franco di Trieste*. Venice.

Rossi, M. (ed.) (2005) *Istria riscoperta*. Rome: Ediesse.

Rumiz, P. (2007) 27 Dec Il confine dentro Trieste, *Il Piccolo*.

Rumpler, H. (2003) Economia e potere politico. Il ruolo di Trieste nella politica di sviluppo di Vienna, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918*. Trieste: Lint, pp. 55-124.

Sapelli, G. (1990) *Trieste Italiana*. Milan: Angeli.

Schiffrer, C. (1946) *Historic Glance at the Relations Between Italians and Slavs in the Venezia Giulia*. Trieste: Stabilimento Tipografico Nazionale.

Schiffrer, C. (1992) *Dopo il ritorno di Trieste all'Italia*. Udine: Del Bianco.

Schiffrer, C. (1996) *Antifascista a Trieste*. Udine: Del Bianco.

Sedmak, V. and Mejak, J. (1953) *Trieste: The Problem Which Agitates the World*. Belgrade: Edition Jugoslavija.

Sestan, E. (1998) *Venezia Giulia. Lineamenti di una storia etnica e culturale*. Udine: Del Bianco.

Sluga, G. (1994a) A no-man's land: the engendered boundaries of post-war Trieste, *Gender and History* 6: 184-201.

Sluga, G. (1994b) Trieste: ethnicity and the Cold War, 1945-54, *Journal of Contemporary History* 29: 285-303.

Sluga, G. (2001) *The Problem of Trieste and the Italo-Yugoslav Border*. Albany: State University of New York Press.
Smith, N. (2003) *American Empire*. Berkeley: University of California Press.
Tamaro, A. (1974) *Storia di Trieste*. Trieste: Lint.
Thomassen, B. (2001), *The borders and boundaries of the Julian Region*, PhD dissertation, European University Institute, Florence.
Valdevit, G. (1997) *Foibe. Il peso del passato*. Venice: Marsilio.
Valdevit, G. (2004) *Trieste. Storia di una periferia insicura*. Milan: Mondadori.
Valussi, G. (1972) *Il confine nordorientale d'Italia*. Trieste: Lint.
Verginella, M. (2001) Sloveni a Trieste tra sette e ottocento: da communita` etnica a minoranza nazionale, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 441-482.
Vinci, A.M. (1992) *Trieste in guerra. Gli anni del 1938-43*. Trieste: IRSLM.
Visintin, A. (2000) *L'operato del governo militare italiano nella Venezia Giulia 1918-19*. Gorizia: LEG.
Visintini, C. (2001) La crescita urbana, in Finzi, R. and Panjek, G. (eds) *Storia economica e sociale di Trieste, Vol. I: La città dei gruppi 1719-1918.* Trieste: Lint, pp. 239-269.
Vivante, A. (1912) *Irredentismo adriatico*. Trieste: Italo Svevo.
Volk, S. (2004) *Esuli a Trieste*. Udine: Kappa Vu.
Waley, P. (2009) Introducing Trieste: a cosmopolitan city?, *Social & Cultural Geography* 10(3): 243-256.

訳者付記

本稿は英語圏を含むヨーロッパにおいて活躍するイタリア人文化地理学者クラウディオ・ミンカ氏による論考である。氏は、トリエステの「コスモポリタン」都市としての来歴を19世紀以降のオーストリア帝国の解体過程と領土ナショナリズムの台頭、さらにイタリア国家の成立と20世紀の大戦という地政的文脈から概説している。議論の中心は、西ヨーロッパの周縁に位置する境界都市としての脱国家的性格と市民に形成された「トリエステ人」としてのアイデンティティであり、領土化と民族ナショナリズムの圧力が増すに地政的変動の中で、トリエステが如何にそのユニークな多民族性（の理想）を保持し、喪失し、そして模索してきたかが、先行研究をもとに論じられている。原英文は必ずしも平易ではなかったが、トリエステの脱国家性や多民族性を評価しようとする氏の姿勢は論考の中で一貫している。今日の日本をめぐる領土問題へのナショナリスティックな注目の高まりを鑑みると、こうした境界都市の社会的、政治的来歴を検証することは、領土やナショナリズムという概念の虚構性や問題性を理解し、境界に如何に向き合うべきかを省察する上で有効と考えられる。

ミンカ氏はここ数年立教大学観光学部で文化・観光地理学を講ずるために来日しており、2012年11月に彼、そして彼のパートナーでもある政治地理学者ルイーザ・ビアラジービッチ氏を招いて、人文地理学会の政治地理研究部会と地理思想研究部会が合同で「地中海境界都市の政治・文化地理」と題する研究会を開催することにした。残念ながら、事情により両者の来日は不可能となったが、山﨑が担当する授業「地理学基礎問題研究演習」において、彼が発表で用いようとしていた論考を翻訳することにした。翻訳担当者と担当個所は、全ウンフィ（第2章）、キーナーヨハネス（第3章）、黒田将広（第4章）、紀元太希（第5章）、山﨑孝史（要旨、第1章、第6章、監訳）である。イタリア人名の読み方については、北川眞也氏（三重大）の助言を得た。